

# 鷗外歴史小説の中の女性像

小 泉 立 身

一 はじめに

二 『護持院ヶ原の敵討』の「りよ」

三 『安井夫人』の「佐代」

四 『山椒大夫』の「安寿」

五 『最後の一句』の「いち」

六 『波江抽斎』の「五百」

七 歴史小説から史伝へ

## 一 はじめに

森鷗外がいわゆる「豊熟の時代」<sup>(1)</sup>（明四〇—大五）の後半に書いた「歴史小説」と呼ばれる作品群は、いずれも格調の高い名作揃いであるが、その中の半数に近い作品中で女性が重要な役割を演じている。『安井夫人』のように、すでに題名からして女性が主人公と思われるような作品の場合はそうなくても当然であるが、形の上では男が主役になっていると言えるもので、実は脇役の（場合によっては脇役の中でもそれほど目立たない位置にいると思われる）女性がきわめて生彩に富む人物として描かれていて、その女性を抜きにしてはその作品は成り立ち得ないと言っ

鷗外歴史小説の中の女性像（小泉）

## 關外歴史小説の中の女性像（小泉）

てもよいようなものが多く、実は彼女たちを描くことが執筆の動機でかなりの比重を占めていたのではなからうかという気さえする。

さらに、そういう女性たち一人一人について見ていくと、それぞれが極めて鮮明なイメージを与える個性的な女性たちであると共に、相互の間には共通する特性が多く認められて、全体として一つの女性像に集約されてくるような気がするのである。そしてそうした女性像を次々と生み出してみせた作者の心を、片隅だけでも覗いてみたくなるのである。

## 二 『護持院ヶ原の敵討』の「りよ」

発表された年代順に取り上げていくと、まず『護持院ヶ原の敵討』（大正二年）がある。

天保四年十二月二十六日の早朝に、今の大手町に在った姫路藩上邸で、金番の山本三右衛門という五十五歳の武士が曲者に襲われて深傷を負った。気丈な三右衛門は曲者の人体を確かに見届けて証言したので、下手人は犯行直後から行方をくらませた表小使の亀蔵という者だとわかった。三右衛門は敵を討ってくれるようにと言いい残して翌朝絶命する。三右衛門には子どもが二人ある。十九歳の倅宇平と二十二歳になる姉のりよである。

三右衛門の遺骸は死んだ翌日菩提所である浅草の遍立寺に葬られる。その折三右衛門の遭難時の遺品が子どもに引き渡される。

― 大小も當然倅宇平が持って歸る筈であったが、娘りよは切に請うて脇差を譲り受けた。そして宇平がそれを承諾すると、泣き腫らしてゐた、りよの目が、利那の間喜にかがやいた。<sup>(2)</sup>―

続いて親族は度度集まって評議し、翌天保五年正月中旬に敵討の願を出す運びになる。

―評議の席で一番熱心に復讐がしたいと言ひ續けて、成功を急いで氣を苛ったのは宇平であった。色の蒼い、瘡せた、骨細の若者ではあるが、病身では無い。姉のりよは始終黙つて人の話を聞いてゐたが、願書に自分の名を書き入れて貰ふことだけは、きつと居直つて要求した。りよは十人並の容貌で、筋肉の引き締まった小女である。―

三右衛門には九郎右衛門と言う九歳年下の実弟があつて、国許の姫路にいた。この弟が兄の計音に接して折り返し助太刀の誓いを伝え、二月五日には江戸に着到した。沈着で筋骨逞しい叔父を見て姉弟は安堵の思いをする。

旅立ちの準備を急ぐある日のこと、九郎右衛門はりよが縫っているものが宇平の身につけるものとしては小作りなのを見て不審がる。

―りよは顔を赤くした。「あの、これはわたくしので」縫つてゐるのは女の脚絆甲掛である。「なんだと」叔父は目を大きく睨つた。「お前も武者修行に出るのかい」「はい」と言つたが、りよは縫物の手を停めない。―

叔父はりよの言うことが思慮深く理に叶っているので「少からず狼狽」するが、結局、「女は連れて行かぬと、きつぱり言ひ渡した。りよは涙を拭いて、縫ひさした脚絆をそつと側にあつた風炉敷包の中にしまった。」

旅立ち直前に、亀藏と一緒にもと酒井家の表小使をしたことのある文吉という律氣者が敵の見識人として同行を申し出る。敵討の許しは宇平・りよ・九郎右衛門の三人あてに出るが、りよは江戸に留められて宇平と叔父と仲間（仲間）の文吉の三人が二月二十九日に旅立つた。

三人は北陸筋から尾張・西国へと経めぐる間に何度か確からしい情報を得たが悉く人違いで、再び大阪まで戻つてきた頃は路銀も尽きる。いつ敵にめぐり逢えるかとて当てのない虚しさに、宇平は次第に精神の平衡を失つて行方をく

らましてしまふ。江戸を出立してから一年余りの歳月が過ぎている。まもなく江戸の親族から、亀蔵を江戸で見かけた者があるという情報を知らせる手紙が届いて、九郎右衛門と文吉は宇平の探索をやむなく打ち切つて江戸に引き返す。

天保六年七月十三日迎え盆の酉の下刻ごろ両国の花火を見る群衆の中で文吉は亀蔵を見つけ、九郎右衛門に合図して後を付ける。二刻余り尾行して神田橋外元護持院二番原に來た時、二人は一気に襲いかかつて亀蔵を取り押さえる。九郎右衛門は亀蔵を縛り上げて、お茶の水の酒井邸の奥向に勤めているりよのもとに文吉を走らせる。母親の急病という口上ですぐりよにお暇を貰わせるための使いである。りよは使者が旅支度の文吉であるのを一目見て本當の事情を察知する。

「「ちよいと忘物をいたしましたから」と、りよは獨言のやうに言つて、足を早めて部屋へ引き返した。部屋の戸を内から締めたりよは、葛籠の蓋を開けた。先ず取り出したのは着替の帷子かたびら一枚である。次に臂ひでをずっと底までさし入れて、短刀を一本取り出した。當番の夜父三右衛門が持つてゐた脇差である。りよは二品を手早く袱紗ふくしゃに包んで持つて出た。<sup>(5)</sup>」

護持院ヶ原は今の千代田区神田錦町と大手町の境の辺りに東西に拡がっていた火除地（6）で敵が捕えられている神田橋付近はその東端に當る。お茶の水からは一キロ半に満たない。いよいよ敵討の場面になる。

文吉がりよを連れて駆けつけると、三右衛門は敵の生国と名前を問ひ正す。すると男は泉州生れの虎蔵と言う者で、以前知り合つた紀州生れの亀蔵の名を騙つていたことがわかる。九郎右衛門は虎蔵の繩を解いて、三人で三方から詰め寄る。

—繩をほどかれて、しょんぼり立ってゐた虎蔵が、ひょいと物をねらふ獸のやうに体を前屈にしたかと思ふと突然りよに飛び掛かつて、押し倒して逃げようとした。

その時りよは一步さがって、柄を握ってゐた短刀で、抜打に虎蔵を切った。右の肩尖から乳へ掛けて切り下げたのである。虎蔵はよろけた。りよは二太刀三太刀切った。虎蔵は倒れた。

「見事じゃ。とどめは己が刺す。」九郎右衛門は乗り掛かつて吭を刺した。

九郎右衛門は刀の血を虎蔵の袖で拭いた。そしてりよにも脇差を拭かせた。二人共目は涙ぐんでゐた。

「字平がこの場に居合せませんのが」と、りよは只一言云った。

りよは志堅固な孝女である。思慮深く心配りが行き届き、肝心なことはきちんと言うが不断は目立たない大人しい娘である。また、本懐を遂げた時まっさきに行方の知れぬ弟を不憫に思うやさしい姉である。

### 三 『安井夫人』の「佐代」

大正三年には『安井夫人』の作がある。

幕末の儒者息軒安井仲平は風采の上がらない小男で、その上幼時に病んだ痘瘡のため片目がつぶれ顔にあばたが残っていた。兄の文治は色白で長身的好男子で、二人が一緒に歩くと村人は猿引きが猿を連れて通ると陰口を言った。この息軒の夫人佐代は息軒と同郷の日向国清武村の評判の小町娘で、しかもまだ十六歳という若さなのに、自ら望んで十三歳年上の従兄の仲平に嫁した。その縁談の成立するくだりがこの作品のハイライトである。

忠平の父滄洲翁は息子の嫁の候補について思案の末、妻の実家の川添家の姉妹に目をつける。妹の佐代は若すぎる

し評判の器量好しなので、どう見ても仲平には不釣り合いだが、姉の豊は十人並の器量で年齢差も九つ、性質も快活なのでこちらを候補に決める。滄洲翁はこの縁談を申し入れる使者の役を仲平の姉の「長倉の御新造」に頼む。御新造はもともと仲平びいきである上に断ることのできない父の頼みなので、初めから難題と覚悟の上でこの大役を受けける。

雛祭の頃に川添家を訪れた長倉の御新造は、井戸端で働いている姉娘のお豊について単刀直入に訪問の用件を話してしまうが、「わたし仲平さんはえらい方だと思つてゐますが、御亭主にするのは厭でございます」ときっぱり拒絶されてしまう。御新造はそのまま帰るわけにもいかなないので一応娘の母親に会つて、訪問した用件と娘に直談判をして断られた顛末を話して辞去した。門を出て二三丁来た時に川添家の下男が追つて来て、急にお話したい事が生じたので引返していただきたいとの口上である。戻つてみると娘の母親の言うのに、豊には改めて話してみたが承知しない、ところがそれを聞いた妹の佐代が、「安井さんへわたくしが参ることは出来すまいか」と母親に申し出た、いろいろ聞いて念を押してみたが、「あちらで貰うてさへ下さるなら自分は往きたい」ときっぱり答えたとの事である。長倉の御新造は「それにしても控目で無口なお佐代さんがよくそんな事を母親に云つたものだ」と意外な感じがしたが、ともかくもう一度母親と二人で佐代の気持を確かめてみようということになつて、佐代を二人の部屋に呼ぶ。

— お佐代はおそるおそる障子をあけてはひつた。母親は云つた。「あの、さっきお前の云つたことだがね。仲平さんがお前のやうなものでも貰つて下さることになつたら、お前きつと往くのだね」お佐代さんは耳まで赤くして、「はい」と云つて、下げてゐた頭を一層低く下げた。<sup>(8)</sup> —

こうして佐代は「美しい肌に粗服を纏つて、質素な仲平に仕えつつ一生を終つた。」「ただに服飾の粗に甘んじた

ばかりではない。立派な第宅に居りたいとも言わず、結構な調度を使いたいとも言わず、旨い物を食べたがりも、面白い物を見たがりもなかった。」そして文久二年の正月四日に五十一歳で亡くなった。仲平は六十四歳であった。ちなみに鷗外の生まれたのは同年同月十九日である。

この安井息軒夫人佐代も『護持院ヶ原の敵討』のりよと同様に、思慮深い意志堅固な女性である。平素口数は少く、おとなしいが自分の決断したことはきっぱりと言うしその通りに実行して悔いするところがない。

#### 四 『山椒大夫』の「安寿」

続いて大正四年一月に発表された『山椒大夫』に注目したい。この作品は言うまでもなく説経浄瑠璃『さんせう太夫』に基づく作品であるが、鷗外がこの説経節正本を選択してその上に自己の作品を構想したのは勿論偶然ではあるまい。また、原本は説経節である以上当然地蔵菩薩の靈験を印象づけることが第一義であるが、鷗外の作品でも守り本尊の地蔵のもとらす奇跡はそれとして残しながらも、その部分はかなり筆を抑制して説経具を減殺し、代わって安寿と厨子王との姉弟愛、とりわけ安寿の愛と献身の崇高さ美しさを描き出すことに最も力が注がれているように思われる。つまり説経節の『さんせう太夫』の安寿はまだ主役ではないが、鷗外の作品における安寿は主役であり菩薩そのものである。

この安寿と厨子王の物語は鷗外の『山椒太夫』を読んだことのない人も知っているので、改めて梗概をたどるには及ばないであろうが、姉弟の別れを描く一節だけ鷗外の簡勁な名文を写しておきたい。

―泉の湧く所へ來た。姉は標子かたけいけに添へてある木の椀わんを出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だ

よ」かう云つて一口飲んで弟に差した。弟は碗を飲み干した。「そんなら姉えさん、御機嫌好う。きつと人に見附からずに、中山まで参ります」

厨子王は十歩ばかり残つてゐた坂道を、一走りに駆け降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大泉川の岸を上手へ向かつて急ぐのである。安寿は泉の畔に立つて、並木の松に隠れては又現れる後影を小さくなるまで見送った。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸にけふはこの方角の山で木を樵きる人がないと見えて、坂道に立つて時を過ぐす安寿を見咎めるものもなかった。

後に同胞はらわちを捜しに出た、山椒太夫一家の討手が、この坂の下の沼の端で、小さい藁わら腹はらを一足拾った。それは安寿の履ふくであつた。<sup>(9)</sup>

この一節は「二河白道図」を連想させる。中山の国分寺へ向かう一筋の道は白道である。厨子王は彼岸へ急ぐ念仏者である。そして見送る安寿は此岸に立つ積尊である。

後に正道と名を改めた厨子王が佐渡の雑太ざうたの農家の庭先で老いた母に再会する場面もこよなく美しいが、作品のハイライトは右に引いた安寿の死で尽きており、最も生彩を以て描かれているのも安寿であらう。安寿は一人のけなげで心やさしい少女としてみごとに肉化されているが、自ら犠牲になることを決意した後の彼女は、「姉えさんのけなげ仰おかしる事は、まるで神様が佛様が仰おかしるやうです」と厨子王をして言わしめるまでに昇華する。

しかしこの女人像を少しずつ我我にとつてより身近な市井の中へ移してみれば、『護持院ヶ原の敵討』のりよにもなり、順境に置けば『安井夫人』の佐代ともなるのではあるまいか。次の作品に登場する小娘も同類の女人像の一例である。



## 五 『最後の一句』の「いち」

大正四年十月に發表された『最後の一句』の主人公は十六歳の小娘いちである。

吉宗將軍の頃の元文三年十一月二十三日、大阪市中に、船乗業桂屋太郎兵衛を斬罪に処する旨の高札が立てられた。太郎兵衛が入牢したのは二年前で、それ以来家族の者は世間とはとんど交わりを絶って暮らしていた。夫の処分が斬罪に決したと聞いても、女房は今までと同じように繰言を言つて泣くだけであつた。太郎右衛門の罪科というのはこういうことである。元文元年の秋、彼の所有する北国通いの船に新七という船頭が乗つて、秋田で米を積んで大阪へ向かつた。その途中運悪く難破しかけ、積荷の半分以上を流失したが、新七は残りの米をかねにして大阪へ持ち帰つた。新七は難船の事實が明らかな以上は残り金まで詮索はされるまいから、この金は米主への支払いに当てるには及ぶまいと言う。大きな損害を受けた後だけに太郎兵衛は迷い心が出てその金を受け取つて隠金にした。ところが米主側の調べで事實が知れて太郎兵衛は入牢し、このたび死罪と決まつたのである。

太郎兵衛には五人の子女がある。長女いち十六歳、二女まつ十四歳、三女とく八歳、その上に女房の里方から養子に貰つた長太郎十二歳、養子を入れた後で生まれた末子の初五郎五歳の計五人である。この長女のいちが、高札の一件について、母方の祖母と母親の話を立き聞いて知つていた。いちはその夜床に入つても思案していたが、ふと父を救う一策を思いついて妹のまつに相談する。養子で跡取りになる長太郎だけ除いて残りの四人の子どもが身代りになつて、父の命を助けて貰うようお奉行様へ願書を持つて行こうというのである。いちは一入眠らずに翌日の明け方近くまでかかつて願書を書き上げ、まつを起こした。長太郎も目を覚まして一緒に行くと言う。三人で二番鶏の鳴く頃

家を出て、途中で夜警の老人に道を訊いて西奉行所を訪ねた。すでに門番に追い帰されるところを幸い願書は詰衆の手に渡り与力から奉行の佐佐又四郎成意の許まで報告された。佐佐は子どもが三人だけで願書を持参したということをまずいぶかった。次いで願書を見て、へたな仮名文字ながら条理が整って要を得ているのを不審に思った。横着な大人が子どもをそのかしてこの挙に及んだのではないかと思った。奉行は帰ろうとしない子どもたちに、願書は内見したが改めて町年寄に出すようにと言わせて持ち帰らせ、翌日背後関係に大人のそのかしがあつたかどうかを詮議することにした。

翌二十四日の白洲には厳めしい賁道具が並べられ、太郎兵衛の女房、五人の子ども、町年寄五人が呼び出された。女房は子どものした事を何も知らず、ただ恐れているばかりである。いち「些の臆する気色もなしに」筋道立てて述べ、まつの外には誰とも相談しなかつたことを重ねて明言した。長太郎は自分の意志で死ぬ覚悟で加わつたことを一層確かにするように、いちに頼んで書いて貰つた単独の願書を持参した。八歳のとくと五歳の初五郎は幼なすぎて要を得なかつたが、これは詮議するまでもなく、奉行の予想した背後関係は出てこない。

「此の時佐佐が書院の敷居際まで進み出て、「いち」と呼んだ。「はい」「お前の申し立には誠はあるまいな。若し少しでも申した事に間違があつて、人に教へられたり、相談をしたりしたのなら、今すぐに申せ。隠して申さぬと、そこに並べてある道具で、誠の事を申すまで責めさせるぞ」佐佐は賁道具のある方角を指さした。

いち是指された方角を一目見て、少しもたゆたわずに、「いえ、申した事に間違はございません」と言い放つた。その目は冷かで、その詞は徐かであつた。「そんなら今一つお前に聞くが、身代りをお聞届けになると、お前達はすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることは出来ぬが、それでも好いか」「よろしうございます」と、同じやう

な、冷かな調子で答へたが、少し間を置いて、何か心に浮かんだらしく、「お上の事には間違はございますまいから」と言ひ足した。

佐佐の顔には、不意打に逢ったやうな、驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて、險しくなった目がいちの面に注がれた。憎悪を帯びた驚異の目とでも云はうか。しかし佐佐は何も言はなかつた。<sup>(10)</sup>

結局事件の結末は、すでに同年同月十九日に桜町天皇の大嘗会が行われていたので、その慶事のために太郎兵衛は死罪を赦されて追放刑で済んだとある。

いち市井の商人の娘で「當年十六歳にしては、少し穉く見える、瘦肉やせじしの小娘である。」しかし、そんな小娘の一言がまさに寸鉄人を刺した。「猷身はこみの中に潜む反抗の鋒は、いちと語を交へた佐佐のみではなく、書院にゐた役人一同の胸をも刺した」のである。

## 六 『汲江抽斎』の「五百」

続いて大正五年には『汲江抽斎』が発表された。この作品はこれまで書かれた歴史小説の諸作とは異って長編であり、一般的に「史伝」という呼び方をされるように、極めて考証的・伝記的色彩が濃い。しかも汲江抽斎なる人物がほとんど知る人も無い幕末津輕藩の定府の儒医で、その生涯も別して波瀾に富むわけでもない。いろいろな点で特異さが目立つ。そしてこの主人公は安政五年八月に五十四歳で亡くなるが、その死はこの作品全体（「その百十九」まで）の半ばのあたり（「その六十二」）で出て来てしまふ。それもただの二行で記されるだけである。続く二章（「その六十三」「その六十四」）に抽斎生前の趣味嗜好などを述べた後で、

陽外歴史小説の中の女性像（小泉）

―大抵伝記はその人の死をもって終るを例とする。しかし古人を景仰するものは、その苗裔がどうなったかということ問わずにはいられない。そこでわたくしはすでに抽斎の生涯を記しおわったが、なお筆を投ずるに忍びない。わたくしは抽斎の子孫、親戚、師友等のなりゆきを、これより下に書きつけておこうと思う。<sup>(11)</sup>―とあって、記される内容の年次は大正五年、つまりこの作品執筆の年まで及んでいる。

こういう極めて起伏に乏しい坦坦たる内容であるが、その中に在って一人生彩を放つのは抽斎の妻五百<sup>あ</sup>である。抽斎は女運が悪く、最初の妻は離別し、二人目三人目の妻は共に死別し、五百は四人目の妻で、抽斎四十歳、五百が二十九歳の時結ばれた。この五百という伴侶を最後に得たことからすれば抽斎は決して女運の悪かった人ではない。五百はこの淡味な長編伝記文学の中の一点の花であり、彼女を欠いていたら『淡江抽斎』は伝記であり得ても伝記文学ではあり得なかったのではないかとまで思われる。

五百は神田紺屋町の鉄物問屋山内忠兵衛の二女である。五百の兄栄次郎は抽斎から儒学を学んでいた。忠兵衛はただの商人ではなく、祖先が遠く土佐の山内家から出ているという誇りを忘れず、子女の薫陶を怠らなかつた。「二人の女にも尋常女子の学ぶことになっている読み書き諸芸のほか、武芸をしこんで、まだ小さい時から武家奉公に出した。中にも五百には、経学などをさえ、ほとんど男子に授けると同じように授けた<sup>(12)</sup>」という。その五百が幼い時から並並でない思慮と胆力を示した話もあって次に記す事件の伏線にもなっているが、今はそれは省いて、五百がいかに非凡の女性であったかを物語る一つの話だけ引用してみる。それはまがいなくこの作品全体の中でのハイライトである。

勤王の心の篤い抽斎は江戸で王室につながるある貴人が窮迫していることを聞いて金策を図る。必要な額は八百兩

という大金である。抽斎は親戚故友を集めて八百両を先取する無尽譚を催し、その金を用意した。その夜、貴人の使といふ三人の侍が訪ねて来た。五百は入浴中であつた。抽斎が三人を奥の部屋に通すと彼等は抜刀する構えをして金を渡せと抽斎に迫つた。その時意外な事が起こつた。

—このとき廊下に足音がせず、障子がすうっと開いた。主客はひとしく愕おどろき殆たゞた。

刀の斜ふに手をかけて立ち上がった三人の客を前に控えて、四疊半の端近く坐してゐた抽斎は、客から目を放さずに、障子のあいた口を斜めに見やつた。そして妻五百の異様な姿に驚いた。

五百はわずかに腰巻一つ身につけたばかりの裸体であつた。口には懐剣をくわえていた。そして、鬨もぎわに身を屈かめて、縁側に置いた小桶二つを両手に取り上げるところであつた。小桶からは湯気が立ちのぼっている。縁側を戸口まで忍び寄つて障子を開くとき、持つて来た小桶を下に置いたのであらう。

五百は小桶を持ったまま、つと一間に進み入つて、夫を背にして立つた。そして沸き返るあがり湯を盛った小桶を、右左の二人の客に投げつけ、くわえていた懐剣をとつて鞘さを払はつた。そして床の間を背にして立つた一人の客を睨にらんで、「どろぼう」と一声叫んだ。

熱湯を浴びた二人が先に、柄つかに手をかけた刀も抜かずに、座敷から縁側へ、縁側から庭へ逃げた。あとの一人も続いて逃げた。

五百は仲間や諸生しよせいの名を呼んで、「どろぼうどろぼう」という声をその間に挟んだ。しかし家に居合わせた男らの馳せ集まるまでには、三人の客は皆逃げてしまつた。このときはのちのちまで浜江の家の一話になつてゐたが、五百は人のその功を称することに、慙はなじて席を遁れたそうである。五百は幼くて武家奉公をしはじめたと

きから、七首<sup>ひし</sup>一口だけは身を放さずに持っていたので、湯殿に脱ぎ棄てた衣類のそばから、それを取り上げることが出来たが、衣類を身にまとう<sup>いさま</sup>運はなかったのである。<sup>(13)</sup>――

『汲江抽斎』の中では、この一節は唯一と言ってよい劇的な場面で、五百のとっさの気転と大胆なふるまいはあたかも修羅物を舞う名人の舞台を観る思いがして、しかも女人であるだけ格別凄艶の趣もある。

この一節の後、作品は元の坦坦たる調子に戻り、次の章「その六十二」の初めには主人公抽斎死去の事が記されていることは前述の如くである。五百は抽斎に後れること二十六年、明治十七年の二月に六十九歳で歿した。その事を記した章の次の章（「その百七」）に注目すべき事がある。それは五百が抽斎に嫁する時の裏話である。

五百の生家の山内家と汲江家との双方に出入りしている医師で石川貞白という人があり、「ある日五百は使いをやって貞白を招いた。」そして、「貞白さん、きょうはお頼み申したいことがあって、あなたをお招きいたしました」と言って、汲江さんの奥さんの亡くなったあとへ、自分を世話をしてはくれまいかと頼んだのである。五百の生家では五百に婿を取って店を嗣がせようという話もあった、貞白はそれも聞いていた。また抽斎と五百とは年齢もずいぶん開いている。

――そこで五百に問い質すと、五百はただ学問のある夫が持ちたいと答えた。その詞には道理がある。しかし貞白はまだ五百の意中を読み尽くすことが出来なかった。

五百は貞白の気色を見て、こう言い足した。「わたくしは婿を取ってこの世帯を譲ってもらいたくはありません。それよりか汲江さんのところへ往って、あの方に日野屋の後見<sup>うしろみ</sup>をしていただきたいと思ひます」貞白は膝を拍った。「なるほどなるほど、そういうお考えですか。よろしい。一切わたくしが引き受けましょう」<sup>(14)</sup>――

こうして貞白によって五百の意中が抽象に伝えられ婚儀の運びとなったという。これは『安井夫人』の佐代が自ら望んで息軒の許に嫁した話とたいへんよく似ている。

前にもちょっと触れたけれど、五百はまだ十二歳の頃江戸城本丸の中に奉公して、並並ならぬ胆力を示したことがあった。（「その三十一」）その話とこの嫁入りの時の内輪話と、前掲の賊を追い払った話と三つ並べてみると、五百の烈女ぶりが鮮明に浮かんでくる。しかし五百はただ烈女であっただけではない。夫に先立たれた後、多くの子女の行末についても配慮を怠らなかつた。特に先妻徳の遺児<sup>やうと</sup>優善は身持ちが定まらず、何度となく五百の努力と期待とを裏切った。しかし彼女は辛抱強く、この蕩子の面目を傷つけずその覚醒を待った。その間には実に含蓄に富む計らいもあった。（「その七十四」から次章にかけて参照）

## 七 歴史小説から史伝へ

以上の五篇の作品に登場する五人の女性は王朝の受領の姫君もいれば、江戸末期の市井の娘も学者の妻もいる。年齢もさまざまであり、また『最後の一句』のいちのように二日間の経緯の中で描かれる娘もあれば、『安井夫人』の佐代、『波江抽斎』の五百のように半生にわたって描かれる女性もいる。しかし、こういう条件の違いはあっても、この五人の女性の間にはいくつかの共通点を認めることができる。第一に彼女たちはひとしく冷静で思慮深い。第二に志操堅固である。自ら持むものを持っている。従って事に処するに当たって優柔でない。行動は機敏であり、大胆である。そして第三に女らしいこまやかな配慮が周囲に及んでいて、人を立てて自ら抑損するところがある。

こういう女性像は長い歴史と文化との蓄積が生み出した一つの典型であって、それを封建社会の所産であるとこ儒

教的道德の所産であるとか言ってみても、それでどうなるものでもない重みを持っている。まやかしないで本物の持つ重量感と言うか、完成されたものの隙の無い美と言うか、そうした揺るぎないものを感じさせるのである。

鷗外の長男森於菟氏は『父親としての森鷗外』（筑摩叢書）の中で、「父は芸術でも科学でも偽のものがきらいである。偽でなくともいい加減のものがきらいである。」と述べておられる。この「いい加減のもの」というのは一般的に言われたのであって、特定なものだけを指したのもあるまいが、別に、「人も知っている通り自然主義一派の文学にはあまり感心していなかったらしい。」<sup>(17)</sup>とも言っておられる。

花袋の『蒲団』（明四〇）や藤村の『春』（明四一）あたりから急激に盛んになるわが国の自然主義文学は、自己の身边を瑣事にわたって露呈し告白する私小説の流行をもたらしした。これは日露戦役後の開放感と新時代への予感の中で興隆する大きな文化現象の一つであるが、時流を超えた視野と識見を持つ鷗外のような巨人の目には少なからず軽薄な風潮とも映ったであろう。<sup>(17)</sup>人間の愚かさ弱さ醜さといった面を過大に描くことが人生の真実を語る所以であるとも言わなければならない風潮の中で、それを全ては否定しないまでも、「人間は必ずしも卑小なだけの存在ではない」という思いが、『うた日記』（明四〇）の作者の胸中には常にあったであろう。<sup>(18)</sup>

その思いが堰を切ったように作品化されて行くのは、乃木大将夫妻の殉死の事があった大正元年九月の翌月からであった。それ以後の鷗外の歴史小説の一作一作に、私は「人は卑小なるもののみに非ず」とつぶやく作者の声を聞く思いがする。そして、こういう「卑小ならざる」人間像を造形するためには、現代小説として書くよりも歴史小説の形をとる方がよくなじむのである。菩薩のような「安寿」も「いち」のような孝女も、歴史小説として描かれれば不自然さを感じずに読める。またいわゆる史伝の形をとることになれば、虚構性が稀薄になるだけに登場人物の実在感



は強まる訳で、五百のような女性の実在感についても説得力が増してくる。まして史伝の類で取り上げられた人物は、一般に知られていない人人ばかりで、取材源は全て鷗外の手中に在る。従っていかに辛辣な評者も虚構の有無などを輕輕に論ずる訳にはいかないから、敬して遠ざかるほかはないのである。勿論、結果としてそうなったのであって、初めからそれを意図して評者の論の及び得ない圏外に題材を求めたという訳ではあるまい。だがいかにもその身のかわし方が鷗外らしく高踏的でもoshiろい。戦わずして優位に立つ兵法の妙味にも似ている。

先に小編『杯』（明四三）の中で一人の少女の口を借りて「それでもわたくしはわたくしの杯で戴きます<sup>(19)</sup>」と孤高自尊の姿勢を表明していたこの巨人の心の軌跡は、歴史小説から史伝への歩みの過程にもその一端を覗かせているではあるまいか。

〔註〕

- (1) 岩波講座日本文学・木下至太郎「森鷗外」において同氏の用いた語。
- (2) 岩波文庫『護持院ヶ原の敵討』一二ページ
- (3) 同 一二ページ
- (4) 同 一七ページ
- (5) 同 四七ページ
- (6) 角川文庫・野田宇太郎『新東京文学散歩・続編』二五ページ参照
- (7) 岩波文庫・前掲書四八～四九ページ
- (8) 同 七〇～七一ページ
- (9) 岩波文庫『山椒大夫・高瀬舟』四〇ページ
- (10) 同 一〇二ページ

鷗外歴史小説の中の女性像（小泉）

鷗外歴史小説の中の女性像（小泉）

- (11) 中公文庫『渋江抽斎』一八七ページ
- (12) 同 九〇ページ
- (13) 同 一七五～六ページ、「その六十一」「その六十二」
- (14) 同 二九八ページ
- (15) 同書二四九ページ
- (16) 同書 同 ページ
- (17) 『ウィタ・セクスアリス』（明四二）の冒頭で「金井君」の語ることは鷗外の自然主義文学への批判を明快に伝えている。岩波文庫『ウィタ・セクスアリス』六～七ページ、また、斎藤茂吉による同書の解説参照。
- (18) 『うた日記』は日露戦役従軍の間に詠まれた詩歌集で、各篇に作者の士魂の昂揚が見られる。
- (19) 新潮文庫『山椒大夫・高瀬舟』一四ページ